神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

益岡隆志先生への遅い送辞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 嘉一郎, FUKUDA, Yoshiichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2073

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

益岡隆志先生への遅い送辞

福田嘉一郎

この文は本来，益岡先生の在職中に書かれるべきものであったが，諸事情があって 6 月の今これを書いている。先生が 3 月までいらっしゃった研究室は現在，客員研究員の部屋になっている。

1991 年の初秋，私がまだ高等学校の教員を勤めていた頃，父が急に病で倒れ，手術を受けた。術後の経過は思わしくなく，長期戦を覚悟した私は，刊行されて間もない益岡隆志著『モダリティの文法』を病室に持ち込み，父が眠っている間はそれを読んでいた。父は快復することなく他界した。その 7 年半後の 1999 年に，私は本学に着任し，益岡先生と職場を共にすることになった。思いもよらない巡り合せであった。

益岡隆志先生は，統語論を中心とする現代日本語文法の研究者である。著書『命題の文法』(1987 年)，『モダリティの文法』は，現代日本語学の方法論に決定的な影響を与えた。著作は単著だけで 7 点，共編著を合わせると 20 点を越え，海外の日本語研究者にも広く知られている。共編著の背景には，先生が組織してきた数々の共同研究がある。

益岡先生の研究テーマは，ヴォイス，モダリティ，主題，複文，叙述類型その他，日本語文法論の主要なテーマの大部分に関わるほど多岐にわたる。また先生は，諸言語のなかの日本語という観点から，文法研究にさまざまな新しいテーマや概念をもたらしてきた。まさに現代日本語学が隆盛に向かう時期に先生は第一人者であり続けたといえ，その功績は計り知れない。加えて先生は，日本語学から一般言語学への発信、文法学のより大きな構想ということを常に意識してきた。

益岡先生の業績のほとんどは，36 年半の本学在任中に成された。このことは残された者にとって大きな誇りである。先生の「神戸市外国語大学教授」という肩書は，小規模で地味な本学のためには，一定の宣伝効果をもっていたのではないかと思う。

私が本学に着任した時，前任校を含めても助教授 2 年目，益岡先生はもう教

授になられて5年目であったから，かなり遠い存在であった。学会などでお話ししたこともなかった。それにもかかわらず，先生は主催されている対照言語研究の会に私をお誘いくださり，そこで私は今に至るまで，非常に多くのことを学ばせていただいている。日本語以外の言語の特徴を知り，先生をはじめとする参加者の鋭いコメントを聞くことは，私の研究にどれほど役立っているかわからない。

益岡先生は「研究会好き」を自認されていて，他にもより若い人たちとの勉強の場を持っている。2007～08 年度に，先生が日本語文法学会会長を務められた時，私は事務局の委員を担当したが，先生の研究会にいた若い人たちが，庶務係としていろいろと助けてくれた。すべてボランティアである。現在では難しい学会運営のやり方かもしれない。しかし，その時の若い人たちが，今では立派な中堅の研究者に育っているのである。

本学において，益岡先生は常に日本語領域の教育活動の中心であった。折にふれて他の教員に声を掛け，現状はどうか，何か問題があれば必ず共有しようと，気遣ってくださった。4 件の博士学位論文を主査されたが，私は 3 件で副査を務めた。審査における先生の指摘，講評は的確で，こちらが勉強させられているような気になったのを思い出す。

大学の業務はしだいに忙しさを増してきた。大学院生は留学生が大半を占めるようになった。時代の変化の中で，益岡先生も何か慌ただしく本学を去って行かれたように，私には感じられる。といいながら，先生には集中講義を依頼しており，研究会も継続している。長い間本当におつかれさまでした，これまでのご厚誼に感謝しますといったんお伝えすると同時に，これからもよろしくお願いいたします，先生のご研究が今後ますます発展していくことを期待し，また確信しておりますと申し上げたい。